

# 衛門三郎伝説と熊野信仰

寺内 浩（愛媛大学法文学部教授）

## The legend of Emon Saburo and the Kumano faith

Hiroshi TERAUCHI

Professor, Faculty of Law and Letters, Ehime University

Generally, the legend about Emon Saburo is believed to be the founding story of the Shikoku pilgrimage - a route that Kobo Daishi traveled - and is considered to be deeply connected with the faith in Kobo Daishi. In the story Emon Saburo, who did a bad deed to Kobo Daishi, embarked on the Shikoku pilgrimage. However, the original legend of Emon Saburo is much simpler than the present version and Kobo Daishi appears only briefly at the very end. It is believed that after Emon Saburo was reborn the faith in Kumano at Temple no. 51, Ishiteji began. In other words, the original legend of Emon Saburo is not based on the faith in Kobo Daishi, but on the faith of Kumano. However, as the faith in Kobo Daishi became stronger, tales based on the faith in Kumano at Ishiteji were changed to explain the beginnings of the Shikoku pilgrimage through faith in Kobo Daishi, as heard today.

### はじめに

一般的には、衛門三郎伝説は弘法大師ゆかりの地を巡る四国遍路の起源伝承であり、弘法大師信仰と関係の深い伝説とされている。しかし、衛門三郎伝説は本当に弘法大師信仰の所産であろうか。本稿は、この点について考察を加えたものである。

### 1 二つの衛門三郎伝説

澄禪の『四国辺路日記』（承応2年（1653））や真念の『四国遍礼功德記』（元禄3年（1690））などにみえる衛門三郎伝説（以下甲とする）の概要は以下の通りである。

河野氏の下人である衛門三郎は悪人で、八坂の宮を訪れた弘法大師の鉢を八つに割ってしまう。その後、衛門三郎の子8人が次々に亡くなり、それが大師への惡事の報いであることをさとった衛門三郎は、発心して大師の跡を追い四国遍路に出る。衛門三郎は死ぬ間際に阿波国焼山寺の麓でようやく大師に出会い、河野の家に生まれ変わることを願う。大師は衛門三郎の左手に、南無大師遍照金剛・衛門三郎と書いた石を握らせる。3年後河野の家にその石を握った子が生まれ、衛門三郎の生まれ変わりであることがわかる。

細部に違いはあるが、大師の鉢を割った報いとして子が亡くなり、発心した衛門三郎が死ぬ直前に大師から小石を与えられ、その後河野の家に生まれ変わるという基本的なストーリーはいずれの縁起にも共通している。同内容のものは『奉弘法大師御伝記』、『弘法大師空海根本縁起』、『四国辺路御開基弘法大師縁起完』など名称はさまざまだが、前半に空海の伝記、後半に四国遍路の由来や功德を記した史料<sup>(1)</sup>にもみえ、以後広く普及する衛門三郎伝説である。

一方、そのころにはこれらとやや異なる衛門三郎伝説が存在していた。「石手寺刻板」（永禄10年（1567））、『四国遍礼靈場記』（元禄2年（1689））、『予陽郡郷俚諺集』（宝永7年（1710））にみえる衛門三郎伝説がそれである（以下乙とする）。

ここには最も古い「石手寺刻板」の衛門三郎伝説を掲げておく。

天長八年辛亥載、浮穴郡江原郷右衛門三郎、利欲にして富貴を求め、惡逆にして仏神を破る、故に八人の男子頓死す、爾より剃髪し家を捨て、四国辺路に順ふ、阿州焼山寺の麓に於て病死に及ぶに、伊予国司を一念言望す、爰に空海和尚一寸八分の石に八塚右衛門三郎の銘を切り左手に封ず、年月を経て国司息利の男子に生まれ、家を継ぎ息方と号す、件石は当寺本堂に置かしめ畢んぬ

（天長八年辛亥載、浮穴郡江原郷右衛門三郎、求利欲而富貴、破惡逆而仏神、故八人男子頓死、自爾剃髪捨家、順四国辺路、於阿州焼山寺麓及病死、一念言望伊予国司、爰空海和尚一寸八分石切八塚右衛門三郎銘封左手、経年月生国司息利男子、継家号息方、件石令置當寺本堂畢）

甲と大きく異なるところは、衛門三郎が四国遍路に出るまでの部分に弘法大師の姿がみえないことである。つまり、衛門三郎が大師の鉢を割ったことや大師を慕って遍路に出たことは見えず、八人の子が死んだのは、衛門三郎が貪欲で仏神に背いたためとされている。また、後半部分にある衛門三郎が握った一寸八分の石の銘も、甲のほとんどは南無大師遍照金剛・衛門三郎とするが、乙には衛門三郎としかない。したがって、甲は全体を通して衛門三郎と大師の関係で話が進むのだが、乙の大師は死ぬ間際の衛門三郎に石を渡す役割をするだけである。

衛門三郎伝説が甲乙二つあることをみてきたが、「石手寺刻板」などにみえる乙の衛門三郎伝説が「本来の衛門三郎伝説」であったことは川岡勉氏が指摘されている通りであろう<sup>(2)</sup>。川岡勉氏は「本来の衛門三郎伝説は、現在伝えられるよりもはるかにシンプルなものであった」とされるが、さらにいえば弘法大師の影が薄いものであった。そうした本来の衛門三郎伝説（乙）が弘法大師信仰の「肥大化」により四国遍路縁起にみられるもの（甲）に変容していくのである。

では、「石手寺刻板」にみえるような衛門三郎伝説はどのように理解すればよいのであろうか。端的にいえば、私はそれは熊野信仰の所産であったと考える。「石手寺刻板」には先の引用部分に続いて以下のような記載がある。

寛平三年辛亥載、權現宮・拝殿・新堂を創る、同四壬子載三月三日、熊野十二社權現を勧請し奉る、安養寺を改め熊野山石手寺と号す、六十六坊敷并びに浮穴郡江原郷を寄附せしむ、願主伊予息方  
(寛平三年辛亥載、創權現宮拝殿新堂、同四壬子載三月三日、奉勧請熊野十二社權現、改安養寺号熊野山石手寺、令寄附六十六坊敷并浮穴郡江原郷、願主伊予息方)

これによると、衛門三郎の生まれ変わりである息方は、寛平3年（891）に熊野權現宮・拝殿・新堂を創建し、翌年に熊野十二社權現を勧請して、安養寺を熊野山石手寺と改める。つまり、衛門三郎の生まれ変わりに続いて熊野信仰の始まりが説かれており、衛門三郎伝説が石手寺における熊野信仰の由来譚として位置付けられているのである。また、『予陽郡郷俚諺集』が息方を「熊野權現の申し子」とするのは、衛門三郎の再生＝息方の生誕を熊野權現の示現と考えていたことを表していよう。さらに、甲の衛門三郎伝説の最後に「石手寺十二所權現始めは是なり」（『弘法大師空海根本縁起』）などとあることも注目される。甲の衛門三郎伝説には弘法大師信仰色が強くあらわれているのだが、それにも関わらずこうした文言が最後に付されているのは、衛門三郎伝説が本来的には石手寺での熊野信仰の始まりを説くものであったからにほかならない。

この点について別の視点から考えてみたい。豊島和子氏は、出家して四国遍路に出た衛門三郎が伊予国司に生まれ変わりたいという世俗的な望みを持つのは不自然で作為的であるとしつつも、そうした伝承がないわけではないとする。氏は、12世紀末の仏教説話集『宝物集』に、公経聖人が一堂建立を発願したが果たせず、死後国司に転生することを望んだなどとあることから、「衛門三郎の唐突な伊予の国司への転生希望は、望む身分に生まれ代わって目的を達したいという遊行聖の性格が色濃く反映されている」と述べられている<sup>(3)</sup>。また、小嶋博巳氏も、懺悔の巡礼をした衛門三郎が伊予の国主に生まれ変わるのは、「仏道修行の起源を語るものとしては奇異の感を抱かざるを得ない」とされる。そして、頼朝坊という六十六部聖が源頼朝に生まれ変わったとする六十六部縁起の話（頼朝坊廻国伝説＝頼朝転生譚）と衛門三郎伝説には「思想上・系譜上のつながりを想定してよいのではあるまいか」とされている<sup>(4)</sup>。

このように伊予国主＝権力者に生まれ変わるという衛門三郎伝説のモチーフは以前の説話や縁起にすでにみえるのだが、着目したいのは生まれ変わりであることを知った権力者が行ったことである。前者では国司となった藤原公経が聖人の宿願である仏堂の供養をし、後者では前世が六十六部聖であったことを知った源頼朝が法華堂<sup>(5)</sup>を建立している。つまり、生まれ変わった権力者の行為は前世の聖と密接に関連しているのである。そうすると、衛門三郎の生まれ変わりである息方が熊野權現宮などを創建し、熊野十二社權現を勧請したことは、衛門三郎あるいはその転生が熊野信仰と深く関わっていたことを示すものといえよう。

ところで、衛門三郎伝説にみえる石手寺（51番札所）、八坂寺（47番札所）、焼山寺（12番札所）のいずれにも熊野權現が祀られ、前二者の山号がともに熊野山であることなどから、衛門三郎伝説と熊野信仰との関係についてはこれまでの研究でもすでに指摘がなされている。たとえば、宮崎忍勝氏は、衛門三郎伝説が修驗者によって唱導された、頼富本宏・白木利幸氏は、熊野修驗者の影響を如実にうけている、とされる<sup>(6)</sup>。しかし、私は、単なる流布や影響ではなく、川岡勉氏がいわれるよう、乙の衛門三郎伝説は熊野信仰の浸

透と深く関わり、その中核には熊野信仰があったと考える。川岡勉氏は、石手寺の堂舎の配置や規模などから、中世において熊野が大きな勢力を有しており、近世になると熊野信仰が本来の薬師信仰を圧倒するようになったことを明らかにされたが、乙の衛門三郎伝説はこうした熊野信仰隆盛の中で作り上げられたものではないだろうか。したがって、乙の衛門三郎伝説に八坂寺、焼山寺など熊野信仰が濃厚にみられる寺院があらわれるのは当然のことといえよう。

もちろん、先学が指摘されているように、悪人が乞食僧の鉢を割る話、生まれた子が石を握っている話などはそれまでの仏教説話集に見えるものである<sup>(7)</sup>。一方、衛門三郎が息方に生まれ変わるという「死と再生」の物語は、説教節『小栗判官』など熊野信仰に関する文学作品の基本モチーフでもある。乙の衛門三郎伝説は、こうしたさまざまな要素を取り入れつつ、石手寺における熊野信仰の由来譚として成立したのであろう<sup>(8)</sup>。

## 2 熊野信仰と弘法大師

次に、乙の衛門三郎伝説が石手寺における熊野信仰の由来譚であったとすると、なぜそのなかに弘法大師がみえるのかについて考えてみたい。この点について参考となるのが武田和昭氏の所論である<sup>(9)</sup>。武田和昭氏は、明石寺（43番札所）にある室町時代中期の熊野曼荼羅に弘法大師が描かれ、また中世に熊野信仰が盛んであった焼山寺に応永7年（1400）の墨書き胎内に持つ弘法大師像があることなどから、中世の「札所寺院における熊野信仰と弘法大師信仰の接点」を見出している。支持すべき見解であるが、中世の札所における二つの信仰の共存とともに、前者の熊野曼荼羅からは熊野信仰における弘法大師の位置づけをうかがうことができるようと思われる。

熊野の本地仏や垂迹神などを描いた熊野曼荼羅は<sup>(10)</sup>、南北朝・室町期のものが30余点残存しているが、熊野及びその他の諸神仏とともに弘法大師がみえるものが4点、そのうち2点が四国にある（京都・聖護院本D、滋賀・西明寺本、愛媛・明石寺本、香川・六萬寺本）<sup>(11)</sup>。このうち明石寺本は、弘法大師だけでなく役行者、北野天神、八幡大菩薩なども描かれていて、中世の熊野信仰が熊野以外の諸神仏をも包み込む複雑・多様な信仰世界を形成していたことを示している。一方、六萬寺本は、熊野十二所権現の本地仏、大峰八大童子、熊野王子とともに「真如親王様」の弘法大師が右下部に大きく描かれている。特定の人物だけが大きく描かれる作例としては、寺門派の祖である智証大師円珍を大きく描いた熊野曼荼羅（聖護院本A）がある<sup>(12)</sup>。こうしたことから、梅沢恵氏は、明石寺本の弘法大師像は「諸尊集会図的に描かれており、北野天神などの諸尊格と同等に扱われている」のに対し、六萬寺本の弘法大師像は「特別な意味を担っている」とし<sup>(13)</sup>、隣接する八栗寺（85番札所）の弘法大師伝承に注目されている。このように、四国に伝わる二つの熊野曼荼羅からは、熊野信仰がさまざまな信仰を包摂するとともに、その中にあって弘法大師が特別な位置を有する場合があったことを示している。

ところで、石手寺においては、永祿10年「石手寺刻板」裏面の「伽藍棟数」に「大師堂」が見えるので、中世末には大師堂が存在していた。そして、永祿9年の焼失以前の様子を示すといわれる「石手寺往古図」によれば、大師堂は本堂や熊野権現社に較べると小ぶりではあるが、三重塔のすぐ北側の伽藍中心部に近いところに位置していた<sup>(14)</sup>。中世末の石手寺では、本堂の薬師堂と熊野権現社が大きなスペースを占めていたが、大師堂も一定の存在感を有していたのである。なお、承応2年（1653）の澄禪『四国辺路日記』によると、当時伊予国内の札所で大師堂があったのは大宝寺、岩屋寺、石手寺の三か所だけであった<sup>(15)</sup>。こうしたことから、川岡氏は、熊野信仰の重要性を前提として、石手寺が「大師信仰の拠点であったとみて間違いないあるまい」とされている。

乙の衛門三郎伝説に弘法大師がみえる理由については、石手寺における以上のような宗教的環境の中で考えるべきであろう。つまり、当時の石手寺においては諸仏神を包摂した熊野信仰が優勢であったが、諸仏神のなかでは弘法大師が特別な地歩を占めていたと思われる。石手寺の熊野信仰世界における弘法大師は、熊野曼荼羅でいえば明石寺本ではなく六萬寺本的な位置にあったのであろう。こうした結果、乙の衛門三郎伝説において弘法大師が衛門三郎に石を握らせる場面に登場することになったものと思われる<sup>(16)</sup>。

## おわりに

以上、本稿では、本来的には衛門三郎伝説は石手寺における熊野信仰の由来譚であり、弘法大師信仰にもとづくものではなかったことを述べてきた。これは衛門三郎伝説に対する一般的な見解と大きく異なるものだが、中世の四国遍路にはさまざまな信仰がみられるのに対し、近世の四国遍路は弘法大師信仰一色になるという近年の研究動向とむしろ合致するものであろう。熊野信仰については先述したが、この他にも中世の四国遍路には念仏信仰、山岳信仰の影響がみられることが先学により指摘されている<sup>(17)</sup>。そして、四国遍路におけるこうした雑多な信仰が江戸時代になると弘法大師信仰に圧倒され、当初は少なかった大師堂が各札所に建立されるなど「大師一尊化」が進むのである<sup>(18)</sup>。衛門三郎伝説の変容もこうした動きに沿ったものであろう。すなわち、弘法大師信仰が強まるなかで、石手寺における熊野信仰の由来譚が、弘法大師信仰による四国遍路の由来を説明する説話を作りかえられていったのである。

## 註

- (1) これらの史料については、拙稿「四国遍路縁起と西国巡礼縁起」(『愛媛大学法文学部論集人文学編』42、2017年)を参照されたい。
- (2) 川岡勉「中世の石手寺と四国遍路」(『四国遍路と世界の巡礼』法藏館、2007年)。以下、特に断りのない限り、川岡氏の所論に触れる場合はいざれもこれによるものとする。
- (3) 豊島和子「四国遍路開創伝説—衛門三郎譚をめぐって—」(『研究論集』(関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部) 59、1994年)。
- (4) 小嶋博巳「縁起と巡礼—頼朝転生譚と六部たち—」(『説話・伝承学』17、2009年)。小嶋氏によると、最古の六十六部縁起(輪王寺本)の成立は室町期だが、その内容はそれ以前にさらにさかのぼる。なお、小嶋氏は、西国巡礼縁起では王権からの逃避が巡礼を生むのに対し、六十六部縁起では巡礼が権力を生む、すなわち両者のベクトルは正反対の方向に向かっているという興味深い指摘をされている。
- (5) 法華堂は「法華経信仰による仏堂」(『日本史大事典』平凡社、1994年)。なお、六十六部は日本全国六十六ヶ国の聖地に法華経を奉納する巡礼である。
- (6) 宮崎忍勝『遍路—その心と歴史—』第5章(小学館、1974年)、頼富本宏・白木利幸『四国遍路の研究』(国際日本文化研究センター、2001年)など。
- (7) 宮崎忍勝『四国遍路』第5章第1節(朱鷺書房、1985年)、近藤喜博『四国遍路』第1部第11章(桜楓社、1971年)など。
- (8) ただし、衛門三郎伝説の起源自体はさらにさかのぼるかもしれない。石手寺の名称が鎌倉時代末期にすでにあったとすれば、なんらかの衛門三郎伝説がそのころから存在した可能性は否定できない(川岡註(2)前掲論文)。
- (9) 武田和昭「四国の辺地修行から熊野信仰へ」(同『四国辺路の形成過程』岩田書院、2012年)。長谷川賢二氏も、香川県東かがわ市の若王寺に伝わる応永年間の大般若經奥書から、熊野信仰と弘法大師信仰の併存を指摘されている(同「中世における熊野信仰と宗派の境界」『四国中世史研究』11、2012年)。
- (10) 熊野曼荼羅については、鈴木昭英「熊野曼荼羅と修驗信仰」(『仏教芸術』66、1967年)、中野照男「熊野曼荼羅図考」(『東京国立博物館紀要』21、1986年)、梅沢恵「各地に伝来する垂迹曼荼羅—熊野曼荼羅(香川・六萬寺)と山王曼荼羅(千葉・觀明寺／滋賀・油日神社)—」(『横浜美術短期大学教育研究紀要』2、2005年)、吉田麻里「熊野曼荼羅の構図とその配置について一本地仏・垂迹神を中心に—」(『女子美術大学研究紀要』36、2006年)などを参照。
- (11) 大阪市立美術館編『役行者と修驗道の世界—山岳信仰の秘宝—』(1999年)には滋賀・唯念寺にも同様の熊野曼荼羅があるとするが未見。なお、聖護院には熊野曼荼羅が四本あり、中野照男氏の分類に従ってA、Dとした(註(10)前掲論文)。
- (12) 聖護院は天台宗寺門派の大本山で、智証大師円珍の開創と伝えられている。また、11世紀末に入寺した増誉が熊野三山別当に任じられて以来、熊野修驗とは密接な関係にあった。なお、聖護院本D、西明寺本の弘法大師は、大峰八大童子、熊野王子、役行者などと同じ大きさに描かれ、「諸尊集会図的」である。
- (13) 武田和昭氏も、六萬寺本の「弘法大師は、明石寺本や西明寺本のように、数多くの尊の中の一尊とは異なり、明らかに弘法大師そのものの存在を主張している」とされている(註(9)前掲論文)。
- (14) 『四国遍路靈場記』の石手寺図には三重塔の北側に「大師堂」と「弥勒」があり、これらが「石手寺往古図」にみえる三重塔の北の二堂であろう。

(15) 大師堂がある札所の数は、『四国辺路日記』は12、元禄2年（1689）の『四国遍礼靈場記』は35だが、寛政12年（1800）の『四国遍礼名所図会』にはほとんどの札所に大師堂が描かれている（頬富本宏『四国遍路とはなにか』第6章、角川学芸出版、2009年）。

(16) 甲の衛門三郎伝説は、鉢を割られた弘法大師が衛門三郎の子供たちを殺すというやや異様なストーリーになっているのだが、本来の衛門三郎伝説の前半部と弘法大師は無関係であったとする、その理由が説明できるのではないだろうか。すなわち、もとは仏罰のため衛門三郎の子供たちが頓死するという話だったのだが、子供たちの頓死を弘法大師への乱暴の結果としたため、「八人の子を大師とりころし玉ふなどいふ事、なお是応ぜぬ義なり」（『四国遍礼功徳記』の衛門三郎伝説に対する寂本の批判）とされる奇異な内容になってしまったのではないだろうか。もちろん、くわず貝、くわず芋の話にあるように、修行僧に冷たくしたり、危害を与えたりすると罰があたるという話だが、罪のない子供たちを次々に殺すというのはやはり異様であり、それは衛門三郎伝説の前半部に弘法大師を無理に登場させたためであると考えられる。

(17) 武田註（9）前掲論文、宮家準「四国遍路の札所と修驗」（同『神道と修驗道—民俗宗教思想の展開一』春秋社、2007年、初出は2002年）、長谷川賢二「四国遍路の形成と山伏の関係をめぐる覚書」（『瀬戸内海地域史研究』8、2000年）など。宮家準氏は、「四国八十八ヶ所の札所は、修驗道をはじめとする多様な民俗宗教の靈地に、大師の遍歴修行の伝承を付加して編成されたと考えられる」とされている。最近では、こうした研究動向は胡光「山岳信仰と四国遍路」（『四国遍路と山岳信仰』岩田書店、2014年）にまとめられている。

(18) 頬富本宏註（15）前掲書は、「当初は修行者のみの参加であった遍路が、一般の庶民へと主流層が移動するようになると、四国の大師一尊化が急激に進んだ」（173頁）とする。

\*本研究はJSPS科研費JP25284124の助成を受けたものです。